

Biscuit Conditional—擬似条件文について

On Biscuit/Pseud-Conditionals

山森 良枝

Yoshie Yamamori

同志社大学

Doshisha University

yy080707@gmail.com

Abstract

This paper examines *if p, q* constructions which includes indicative conditionals. It is widely assumed that the *if*-clause specifies the circumstances in which the consequent is true. For example, the sentence in (1) indicates that Mary's leaving has something to do with the venue of John. Given the facts, there is a long-standing generalization that in *Standard Conditionals* (SCs) like (1), there is a dependent relation between the two propositions that appears to be causal relation between the two actions accomplished.

(1) If John comes, Mary will leave.

However, some examples stand in contrast to this generalization. In the famous example in (2), which Austin (1956) calls *Biscuit Conditionals* (BCs), the *if*-clause specifies the circumstance in which the consequent is relevant, not the circumstance in which it is true.

(2) There are biscuits on the sideboard if you want them.

The interpretation of (2) presents a puzzle: if we faithfully follow the generalization about the indicative conditionals, we would expect (in a science fictional context) the sentence to have a dependent reading such as "there is a causal connection between her hunger and the presence of biscuits on the sideboard". In this paper, I will pursue two questions: (I) How such independent-biscuits reading is obtained? (II) How does the ambiguity-chimericity come about?

Keywords — **biscuit conditionals, standard conditionals, chimerical conditionals, presupposition projection**

1. はじめに

条件文は *if p, q* の形式を持つ。条件文の表現形式は言語によって異なるが、どの言語においても、一般的に条件文では、(1)のように、条件節 *p* が条件、

主節 *q* がその帰結を表すという意味で、*p* と *q* の間に依存関係があることを示す。

(1) If it does not rain (*p*), we will eat outside (*q*).

ところが、条件文の中には、Austin(1956)が *Biscuit Conditional* (BC) と呼んだ(2)や(3)の、*p* と *q* の間に依存関係が成立しない例がある。(坂原(1985)では BC を擬似条件文(Pseud Conditional)と呼ぶ。)

(2) There are biscuits on the sideboard if you want them.

(3) There is beer in the fridge if you're thirsty.

(1)を *Standard conditional*(SC)と呼ぶと、SC は(4)の *contraposition* に言い換えられるが、前件-主節間の依存関係を表さない BC は(5)のように言い換えられないという特徴を持つ。

(4) We will not eat outside if it rains.
(cf. (1a))

(5)# There are not biscuits on the sideboard if you do not want them. (cf. (2))

SC と BC にはまた、BC は主節の真を示唆するが、SC はしない、という違いがある(Austin, 1956)。これらの違いから、(2)は、SC ではなく、聞き手にビスケットを食べてもよいと許可する文として解釈される。ここでは、前件-主節間に、原因-結果などの依存関係がある SC(1)の解釈を「依存読み」、依存関係がない BC(2)(3)の解釈を「非依存読み」と呼ぶ。

(2)のような BC には「非依存読み」以外に、SF 等の文脈を仮定すると「聞き手の食欲嗜好とビスケットの出現/存在との間に何らかの因果関係がある」という「依存読み」も可能になり、BC では、1つの形式に2つの解釈が生じるというパズルが引

き起こされることになる。本論では、このような BC の特性、ふるまいに注目して、以下の 2 点について考察する。

- (I) 「非依存読み」はどうして生じるのか。
- (II) BC に「依存読み」と「非依存読み」の 2 通りの読みが生じるのはなぜか。

2. 先行研究¹

2.1 坂原(1985)

坂原は、(英語では If p, because q, r. は非文法的だが)、日本語では(3)を(6)のように言い換え得ることを根拠に、①SC では p は q を導き出す決定的要因であるのに対して、BC では、対話者間の知識のアンバランスを背景に、「p は明示されない結論 r を探し出すための指令」として機能する、と主張する。そして、②BC-擬似条件文は、一種の間接発話行為として、理由節と条件節さえあれば結論が導き出せるとき、カラ節が結論を押しつけて主節に居座る結果できたものであることを主張する。

- (6)喉が渴いていたら(p)、ビールが冷蔵庫に入っている(q)から、(飲んでもいいよ(r))

坂原の指摘は主に BC の分布条件として捉え得るもので、どのような文脈に BC が現れるかと言うことを理解する役に立つ。しかし、①p が「明示されない結論 r を探し出す指令」にどうしてなり得るのか、② “if p, q” の条件文の形式から(6)のような解釈と「依存読み」の両方がなぜ可能であるのか、を予測する役には立たない、ということである。

2.2 Franke (2007)

Franke は、動的意味論を援用して、条件文の意味を context set c の if p, q による update として捉えられると主張する ((7))。(c は common ground:CG²-背景/文脈の略である。)

$$(7) c + \text{“if } p, q\text{”} = (c \cap p \cap q) \cup (c \cap \sim p)$$

Franke によれば、(7)は以下の手続きに即して解釈される: (i) p による c の update の結果、仮定的文脈 c + p が生じると、(ii) q が c + p において評価されることになり、(iii)その結果が c に再統合される。もともと、p と q の間に (p が q の十分条件であるといった) 依存関係のない BC では、p を c に付加することにより、文脈 c が q を適切に評価し得る文脈 c + p にシフトされることになる。従って、BC は (common ground の要素ではない) q の発話を最適化する談話機能を持つ、とする。

このような Franke(2007) の分析は、BC の談話機能を明らかにした点で評価されるべきものである。しかし、BC(2)が持つ語用論的意味やその直観的な解釈である(8)がなぜ推論されるのか、という問題を考えるためには、それだけでは不十分である。

- (8)ビスケットを食べてよい(r)

また、(3)に、(8)の読みと「依存読み」の両方がどうして可能になるのか、という点についても明らかではない。

2.3 Francez (2015)

Francez は、Franke(2015) を土台に (II) の問題について考察し、BC の曖昧性 (Francez ではキメラ性)の要因は主節にあるとする。即ち、主節 q に含まれる定記述は familiarity presupposition (Heim, 1982) と結びついており、文脈に応じて rigid designator または個体概念の読みを得る、とする。そして、前者の場合、p と q の間に依存関係は成立せず BC として解釈される。一方、後者の場合、(Lewis(1975)/Kratzer(1986)スタイルのアプローチでは、直接法条件節はそれ自身が特定の意味を持たず、must に対応する潜在的なモーダル・オペレータのドメインを制限するため、q に含まれる定記述が個体概念を表す場合には、p と q の間に依存関係が

¹ Biscuit conditionals に関する研究には、2 節で触れる坂原(1985)、Franke(2007)、Francez(2015) 以外に、Austin(1956)、Ducrot(1991)に BC について言及がある他、Siegel (2006)、van Rooij (2007)、Christian et. al. (2014) 等がある。なお、Van Rooij(2007)については、4.1 節で触れる。

² Common ground(CG)は、“the set of speaker’s presuppositions” あるいは、“mutual knowledge/common knowledge”とも言われるように、会話の背景ともいべき会話の参与者間の共有知識を指す。

成立し SC として解釈される、とする。

しかし、次の BC では、主節に含まれる定記述の “le droit (the right)” は、条件節・主節間の依存関係の有無にかかわらず、常に条件節を先行詞とする “le droit de venir (the right of coming)” という解釈を持つ。上の Francez(2015)の分析は、このような事例を予測することはできない。

(9) Si tu veux venir, tu as le droit. (If you want to come, you have the right.) (Ducrot, 1991)

3. 前提の投射と BC/SC

坂原(1985)を踏まえて、BC の語用論的意味には、“if p, q”の含意(implicature)もしくは非明示的な結論 r (cf.(8)) も含まれると仮定すると、 $\langle q$ は $c + p$ において評価される \rangle とする Franke の分析は不十分なものになる。本論では、むしろ、BC は(10)のような意味を持つ、と考えられることを提案する。

(10) $(p \cap q) \rightarrow r$ or $(c \cap p \cap q) \rightarrow r$

(10)は、p と q の命題の連言から r が示唆/推論される、つまり、r は $p + q$ (もしくは $c + p + q$) において評価される、という解釈を持つ。

前提の投射に関する Karttunen & Peters (1979) (以下、K&P)スタイルのアプローチ³を仮定すると、SC では、q の前提は $c + p$ によって満たされるので、p と q の間に依存関係が成立することになる。一方、p と q の間にそもそも依存関係が成立しない BC では、q の前提が $(c +) p$ によって満たされることはない、つまり、 $(c +) p$ は q の前提として満たされることはなく、 $((c + p) + q)$ のように、継続して投射が行われ、r の前提として満たされた時点で投射が完結する。その結果、BC として(8)の読みを得る、ということになる。

この考えが妥当であれば、単純な前提の投射モデルを仮定することにより、BC の語用論的意味がどのように生じ、また、“if p, q”の形式に、どのようにして、BC の「非依存読み」と SC の「依存読み」の 2

³ Karttunen & Peters (1979)では、“p and q と “If p then q” は同じ次のようなルールを持つ。

(i) ps $(p \wedge q) = (ps(p) \wedge (p \rightarrow ps(q)))$

(i)の意味は、and の継承特性から、

つの読みが生じるのかを、前提の投射という視点から統一的に捉えることができるようになる。

しかし、それで全ての問題が解明されたわけではない。SC では、q の前提は $c + p$ によって満たされるので、p と q の間に依存関係が成立するものの、そもそも “if p, q” の p と q の間に依存関係がない BC において、 $((c + p) + q)$ のように文の左から右への前提の漸次的投射を引き起こす条件/要因は何か、言い換えれば、SC において、前提の漸次的投射を阻止する要因は何か、については依然として不分明である。

次のセクションでは、van Rooij(2007)の分析を参照しながら、この点について考察する。

4. 前提と発話文脈

Stalnaker (1974)、Karttunen(1974) において、前提は、(11)が示す通り、文脈への要求として捉えられる (Kadmon,2001)。(ps: presupposition)

(11) B is a ps of S iff S can be felicitously uttered only in contexts that entail B. (Kadmon, 2001:119)

前提は、当該文が適切に使用されるための基礎的条件である、という意味において、“if p, q”が発話される会話/文脈構造が、BC, SC の解釈に影響を及ぼすと考えることは、極めて妥当である。従って、“if p, q”に BC, SC の解釈が生じる文脈構造にどのような違いがあるのかを明らかにすることは重要な問題である。

このセクションでは、このような視点からの考察の出発点として、van Rooij (2007)の分析を確認することから始めよう。

4.1 Unconditional presupposition

前節で触れた Karttunen & Peters (1979)スタイルの前提の結合アプローチに従えば、(12a)のような例には、(12b)のような前提が予測される。ところが、実際には、(12b)ではなく、主節の条件的前提が強化された(12c)の unconditional

p と q の連言が文脈 c で発話されると、c が p の local context となり、 $c + p$ が q の local context になる、と理解することができる。

presupposition と呼ばれる前提を持つ場合がある。

- (12)a. If the bottle is empty, then [John]_F drinks too.
 b. If the bottle is empty, there is someone other than John who drinks.
 c. There is someone other than John who drinks.

van Rooij (2007)は、このような現象を対象に、unconditional presupposition は、K&P スタイルの結合アプローチで予測できないのではなく、むしろ、条件節と主節の独立性の問題に還元されるべき現象であると主張する。ただ、 $\phi \rightarrow \psi$ において、 ϕ と $\neg\psi$ が同時に真であると考え、標準的な独立性の概念と矛盾する。そこで、van Rooij (2007)では、Lewis(1988)に基づき、(ϕ と ψ が文脈 σ において、互いに独立していると言えるのは、 ϕ の真偽とは無関係に ϕ と $\neg\psi$ が可能であり、同時に、 ϕ の真偽とは無関係に ϕ と $\neg\psi$ が可能である、という)「弱い独立性」の概念を仮定し、次のように規定する。

(13)Lemma4.3(independence)

Formulae ϕ and ψ are independent of each other in context σ iff the following four conditions are satisfied (where $\Diamond\phi$ means that $[\phi](\sigma) \neq \emptyset$)

- (i) If $\Diamond\phi$ and $\Diamond\psi$, then $\Diamond(\phi \wedge \psi)$,
 (ii) If $\Diamond\phi$ and $\Diamond\neg\psi$, then $\Diamond(\phi \wedge \neg\psi)$,
 (iii) If $\Diamond\neg\phi$ and $\Diamond\psi$, then $\Diamond(\neg\phi \wedge \psi)$, and
 (iv) If $\Diamond\neg\phi$ and $\Diamond\neg\psi$, then $\Diamond(\neg\phi \wedge \neg\psi)$.

(van Rooij 2007:296)

以下は、van Rooij の主張の簡単な概観である。

$\phi \rightarrow \psi$ の条件文の形式が質料含意として解釈される場合、話者が ϕ を主張することには、現行の前提状態 (presupposition state) :以下、PS) を ϕ によって更新 (update) する効果があると仮定すると、話者が ϕ と ψ が相互に独立しているという前提を有するとき、 $\phi \rightarrow \psi$ を適切に発話することはできない。 $\phi \rightarrow \psi$ の発話後、PS が $\phi \wedge \psi$ に更新されることは認められないからである。

しかし、“ $\phi \rightarrow \psi$ ” の ϕ が χ を前提として持つ場合、K&P (1979) スタイルの結合アプローチに従

えば、 ϕ の前提は ϕ ではなく χ であるので、“ $\phi \rightarrow \psi$ ” は “ $\phi \rightarrow \chi$ ” という前提を持つことになる。ここで、(i) assertion は文脈 σ に即して適切なので、(ii) ϕ と χ は、 σ において相互に独立していることが前提されていると仮定すると、PS あるいは σ において、 $[\phi \wedge \neg\chi](\sigma) = \emptyset$ 、即ち、 $\Diamond(\phi \wedge \neg\chi)$ は偽となる。(13)の Lemma4.3 から、 $\neg\Diamond\phi \wedge \Diamond\neg\chi$ がこのケースに当たる。ただし、“ $\phi \rightarrow \psi$ ” が適切に作られているとすると、 $\Diamond\phi$ が成立し、さらに、 $\neg\Diamond\neg\chi \equiv \Box\chi$ も成立することになる。しかし、これは、 χ が前提されている、ということに他ならない。van Rooijによると、以上は、話者が、 $\neg\phi$ と χ の双方を前提として持つ場合、つまり、条件節と主節が無関係であることが前提されている場合に、 χ が強化されることを示すものである

ただし、文化や文脈から、条件節と主節が無関係ではないと判断される(14a)は、(14b)を前提として持つ。従って、unconditional presupposition は生じない。

- (14)a. If Jane takes a bath, Bill will be annoyed that there is no more hot water.
 b. If Jane takes a bath, there will be no more hot water. (Beaver, 1995)

Beaver(1995)の言葉で言えば、我々は ϕ と ψ が独立しているとも独立していないとも考えることができるが、独立している方がより適切であるとき、unconditional presupposition が生じる、ということである。

以上の議論から、van Rooij は、最も自然なデフォルト・ルールは、話者が χ を前提として持つとき、話者以外の(例えば会話参与者ではない、文主語等の)agent もこれと整合的な前提を持つ： $\Box\chi \wedge \Diamond K(a, \chi)$ 、というものであり、unconditional presupposition が生じるためには、 χ が σ において予め前提されている必要がある、とした。

4.2 非依存読みと前提強化

以上の議論を踏まえて、BC に生起する非依存読みと unconditional presupposition の関係を見てみよう。

4.1 で触れた通り、van Rooij の分析によると、“ $\phi \rightarrow \psi$ ” という ϕ が χ を前提として持つ文に、 ϕ と ψ が相互に独立し、かつ、 χ が当該文脈において予め前提されている場合、 χ が強化され、unconditional presupposition が推論される。

一方、if p, q の形式に生起する非依存読みも、

p と q が互いに独立している場合に、 $p+q$ (もしくは $c+p+q$) を前提に、生起する。

従って、unconditional presupposition と非依存読みは、条件節と主節が相互に独立している文脈で生起する、という共通点を持つ。しかし、違いもある。

まず、unconditional presupposition の場合、強化の対象となる χ は、発話時以前に予め主節 ϕ の (非明示的な) 前提として当該文脈に導入されている。これに対して、BC で推論される r は、条件節 p と主節 q を前提として生じるものであり、発話時以前の当該文脈では排除されている、即ち、話者と話者以外の agent に共有されていない情報である。つまり、BC では、 r ではなく、 r の前提 p, q だけが明示的に与えられており、形式として顕在化されている。

4.1 節で触れたように、van Rooij (2007) によれば、 χ が発話時において予め前提されている文脈が与えられていることが、unconditional presupposition が現れるための条件であった。

unconditional presupposition では前提 χ が CG の要素であるのに対して、BC の r は CG の要素ではないとすれば、BC において非依存読み r が生じるためには、 r の前提となる p と q が、発話時において話者と話者以外の agent にも共有されている、つまり、当該の発話文脈/CG に予め与えられていなければならないのだろうか。

次のセクションでは、BC を構成する p と q が、発話文脈において予め前提されているか否かを見る手立てとして、日本語に存在する 4 つの条件表現を見ることが出来る。

4.3 日本語の条件表現

英語の indicative conditionals に対応する日本語の条件節の主要部を構成する条件表現には、「ば/たら/と/なら」の 4 つの形式がある。

『現代日本語記述文法 6』によると、「ば」は広く用いられる条件形式であり、一般的に条件節と主節の命題間の論理的関係を表し、典型的に用いられるのは、(15a, b) のように、条件節が仮説を表し、主節が判断を表す場合である。

- (15) a. 時間があれば、行く
b. 雨が降らなければ、外で食事をしよう

これに対して、「たら」は時間的階層での条件設定に用いられ(益岡, 1997)、(16a, b) のように、もっぱら条件節が表すまだ起こっていない事態が実現した場合に起こる事態を主節が表す場合に使用される。従って、主節は常に非過去時制を取る。

- (16) a. 授業が終わったら、事務室に来てください
b. 山田さんに聞いたら、教えてくれるだろう

また、「と」はもっぱら以下のように一般条件、反復条件、事実条件を表す。

- (17) a. 春になると、花が咲く
b. 彼は酒を飲むと、おしゃべりになる
c. 蛇口をひねると水が出た

そして、「ば/たら/と」とは違う特徴を持つのが「なら」である。その第一の特徴は、(18) のように、「話の現場で話し手が受け取ったばかりの情報を仮定的に取り上げること」にある(『現代日本語文法 6』: p. 103)。

- (18) A: 9月にイタリアに行くんです
B: あなたが行くなら、私も行きたい

以上を踏まえて、日本語の BC にどの条件表現が適合するか検討してみよう。まず、BC においては、条件節と主節の間に依存関係がない。そのため、命題間の論理関係や一般条件を表す「ば/と」は容認されないことが予測される。

- (19) 喉が {*渴けば/渴いたら(渴いていたら)/*渴くと/渴いているなら(渴くなら)} 冷蔵庫にビールがある {よ/*ね}
(20) ナポリに {*行けば/*行ったら/*行くと/行く(の)なら}、いいレストランを知っている {よ/*ね}

(19) (20) が示すように、予測通り「ば/と」は BC と共起し得ないことが分かる。次に、「たら」は(19) のように状態を表す場合を除けば、(20) のように、前件と主節の間の時間的依存関係を表す「たら」は容認されないことが分かる。これに対して、「なら」はどの例でも問題なく生起することができる。

以上から、4つの条件表現のうち、BCと共起し得る条件表現は「なら」にほぼ限定されることが分かる。これは、条件節がif節に大きく偏る英語の場合と大きく異なり、日本語の条件表現に存在するBCでの使用に関する形式上の選択制限から、少なくとも日本語のBCを形成する条件節命題は、「話の現場で話し手が受け取った情報」、言い換えれば、発話文脈で予め前提されている情報に限定される、とすることができる。

そして、主節命題についても、(19)(20)が示すように、主節に付加される終助詞に関する選択制限があり、そこから、主節命題の特性を伺うことができる。終助詞の「ね/よ」はdiscourse particleと呼ばれるように、共起する文の表す情報の帰属を表す機能を有し、(21)(22)のように、「よ」は聴者が知らない話者だけが知る情報と共起し、「ね」は逆に、話者と聴者の共有情報と共起することが知られている。

(21) 電話で、遠く離れた冬の北海道の知人に対して：

「今日は、暑い{よ/*ね}」

(22) 駅で出会った知人との会話で：

「今日は、いい天気です{*よ/ね}」

従って、(19)(20)から、BCの主節命題は、話者だけが知る、当該の発話文脈で排除されている情報であると考えることができる。

以上の日本語の条件表現の観察結果から、BCを形成する条件節は、当該文脈で前提されている情報を内容として持ち、主節は、当該文脈で排除されている話者の信じる情報を内容として持つ、ということになる。このような発話文脈を仮定すると、BCにrの読みを引き起こす仕組みはどのようなものになるのだろうか。

5. 省略三段論法

先述したように、冒頭に示した(2)(3)のようなBCでは、r (“you may eat biscuits” / “you may drink beer”) が明示的に与えられているわけではない。このような環境において、rを示唆する潜在的なトリガーは、 $(p \cap q)$ の連言、即ち、BCの文連鎖そのものだと考えられる。しかし、if p, qの形式からは、SCの解釈も生じることを考慮すれば、

その背後に(BCの場合にだけ生じる) rの導入を可能にするための何らかの潜在的なメカニズムが存在していなければならない。

そこで注目したいのが、ある結論を導くための論証の1つとして知られる省略三段論法である。省略三段論法は、三段論法から、その前提を省略した推論の手法である。例えば、(22)の三段論法的前提aを省略した(23)がこれに当たる。

(22) 三段論法

- a. すべての人間は死ぬ (前提)
- b. ソクラテスは人間だ (前提)
- c. ソクラテスは死ぬ (結論)

(23) 省略三段論法

- b. ソクラテスは人間だ (前提)
- c. ソクラテスは死ぬ (結論)

省略三段論法で省略された前提((22)ではa「すべての人間は死ぬ」)は、<common ground:CG>の要素である。このことから、省略三段論法は、会話参加者が共有する背景知識に潜在する「隠れた前提」を利用して遂行される推論である、とすることができる。

BCの背後にも省略三段論法に類似した推論メカニズムを見ることができる。例えば、冒頭の(3)は、(8)の読みを持つが、(24)の三段論法的前提の1つ—(24b)—を省略した省略三段論法の(25c)では(8)に類似する結論が導かれる。

(24)a. 喉が渴いたら(p)、何か飲む (前提)

- b. (喉が渴いているとき) 冷蔵庫にビールが入っていたら(q)、ビールを飲む(r) (前提)

- c. 喉が渴いたら(p)、冷蔵庫のビールを飲む(r) (結論)

(25)a. 喉が渴いたら(p)、何か飲む (前提)

- c. 喉が渴いたら(p)、冷蔵庫のビールを飲む(r) (結論)

このように、BCの解釈は、(24)に示した三段論法的前提bを省略した省略三段論法に類似したメカニズムによって導出されることが推測される。

しかし、(22)-(23)と(24)-(25)は全く同じメカニズムを持つわけではない。(23)の省略三段論法

で省略された「隠れた前提」：「すべての人間は死ぬ」は普遍的真理として誰もが共有可能な命題である。これに対して、(25)で省略された「隠れた前提」：「冷蔵庫にビールが入っている」(q)は誰もが共有可能な普遍的真理ではない。話者と聴者だけが存在するモデルを仮定すると、4.3で触れたように、結果節のqは、発話時において、聴者が知らない(と話者が思っている)情報である。

4.3で検討した日本語の条件表現とBCの共起可能性が上のようなものであるからといって直ちに一般化することはできないが、少なくとも、日本語において、BCを形成する条件節は、当該文脈で前提されている情報を、また主節は、当該文脈には含まれていない、話者(だけが知る)情報をそれぞれ表すと考えると、BCの条件節は会話のトピックとしての特性を備えているように思われる。

(3)のようなBCでは、発話の順に文の左から右へと((c+p)+q)のようにrの前提(となる要素のpとq)が漸次的に投射される、という視点から見れば、pがトピックを設定し、このトピックに関連する情報としてqが導入されることは、極めて自然な情報の流れである。qは当該の発話文脈から排除されている情報を新規に発話文脈/CDに導入する機能を持ち、それにより、聴者の知らない(省略三段論法の省略されていた)情報が聴者にも与えられ、推論が円滑に行われた結果、(8)の読みが導出される、と考えることができる。(8)は話者の聴者に対する「ビールを飲んでよい」という許可-提案のニュアンスを持つ。このニュアンスは(25c)の条件節命題が聴者に関する情報であるのに対して、主節命題が話者しか知らない情報であるという情報の帰属先の不一致に起因する読みだと考えることができるだろう。)

しかし、pが会話のトピックとして設定されなければ、qが新たな情報を付加する、という情報の流れも生じないことは重要である。

従って、条件命題pが当該文脈で前提されているかどうか、(pが当該会話のトピックとして設定されるかどうかに影響を与える、と考えられる点において)、BCとSCの解釈を区別する主たる要因で

ある、と考えることができる⁴。

2.2で触れた Francez (2015)は、BCの曖昧性の要因は結果節にあると主張する。これに対して、本論では、曖昧性の要因は結果節ではなく、条件節にあることを提案するものである。

6. まとめ

本論では、K&Pスタイルの前提の投射モデルを仮定し、BCの意味は、 $(p \cap q) \rightarrow r$ もしくは $(c \cap p \cap q) \rightarrow r$ であることを提案した。

この分析は、日本語の条件表現の分布に基づいて、BCを形成する条件節は、当該文脈で前提されている情報を会話のトピックとして設定し、主節は、当該文脈に新たに付加される話者情報をトピックへのコメントとして提示するという情報構造を持つと考えるものであり、発話の順に文の左から右へと((c+p)+q)のようにrの前提(となる要素のpとq)が漸次的に投射される、という情報の流れは極めて自然なものとして理解することができる。

従って、条件命題pが当該文脈/CGの要素であるかどうかは、pが会話のトピックとして設定されるかどうかに影響を与える、と考えられる点において、BCとSCの解釈を区別する主たる要因である、と考えることを合わせて示した。

参考文献

- Austin John L. (1956) *Ifs and cans. Proceedings of the British Academy XLII*: 107-132.
- Beaver, D. (1995) *Presupposition and Assertion in Dynamic Semantics*. Ph.D. thesis, CCS. Edinburgh, UK.
- Ducrot Oswald (1991) *Dire et ne pas dire*. Paris: Hermann.
- Ebert, C. C. Ebert & S. Hinterwimmer (2014) A unified analysis of conditionals as topics. *Linguistics and Philosophy* 37(5): 353-408.
- Francez Itamar (2015) Chimerical conditionals. *Semantics & Pragmatics* 8-2: 1-35.
- Franke Michael (2007) The pragmatics of biscuit conditionals. *16th Amsterdam colloquium*: 91-96.
- Kadmon, N. (2001) *Formal Pragmatics*. Blackwell

⁴ 4.3で触れたように、「ば/たら/と」がBCと共起し得ないことは、その傍証の1つであると考えられ

る。

Publishers. Malden, MA.

- Karttunen, L. (1974) Presupposition and linguistic context. *Theoretical Linguistics* 1: 181-194.
- Karttunen, L. & S. Peters (1979) Conventional implicature. C.K.Oh and D. Dinneen (eds.) *Syntax and Semantics, Presupposition*, Vol. 11. Academic Press. New York.: 1-56.
- Kratzer, A. (1986) Conditionals, *Chicago Linguistic Society* 22(2): 1-15.
- Lewis, D. (1975) Adverbs of quantification. E.L Keenan (ed.) *Formal Semantics of Natural Language*: 3-15. Cambridge, MA:Cambridge University Press.
- 益岡隆志 (1997) 『複文』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (2008)『現代日本語文法 6』くろしお出版.
- van Rooij, R. (2007) Strengthening conditional presuppositions. *Journal of Semantics* 24(3): 289-304.
- 坂原 茂(1985)『日常言語の推論』東京大学出版会.
- Siegel, M. (2006) Biscuit conditionals: Quantification over potential literal acts. *Linguistics and Philosophy* 29(2):167-203